Ⅳ　連携型中高一貫教育の基本方針を具現化する方策

１　連携型中高一貫教育校の接続の在り方

「学力を身に付ける中高の接続」、「生徒理解を深める中高の接続」、「個性を伸ばす中高の接続」、「中高を通して行われる地域との接続」という４つの視点から、連携型中高一貫教育校で推進すべき接続の具体例を次にまとめた。

（１）学力を身に付ける中高の接続の具体例

得られる効果

基礎的・基本的な学習内容の定着と生徒の可能性を生かす発展的な学習指導の推進

接続の具体例

①６年間を見通したカリキュラムの改善
②６年間の「総合的な学習の時間」による学校の特色づくり
③中学１年生からの学習の足跡を残すチャレンジテストの実施
④夏季休業日等を利用したゼミ等の実施　　等

【６年間を見通したカリキュラムの改善】

中学校においては、高校の授業内容に接続する選択授業を設定し、高校教員による専門性の高い授業を行う。また、高校においては、習熟度別学習に中学教員が指導に加わり、中学時の内容にさかのぼり学習指導を行う。こうした授業交流などに加えて、中高の教員による研修会、研究会を行い、学習指導の実践と６年間を見通した指導内容・指導方法についての研究することで、カリキュラムの改善を図ることができる。

また、学習指導要領に定める「連携型中学校・高等学校の教育課程の基準の特例」資料８を活用し、地域と学校の実態に応じた連携型の中高一貫教育を実践するための特色ある教育課程を編成する必要がある。

【６年間の「総合的な学習の時間」による学校の特色づくり】

連携型中学校において接続する連携型高校の設置学科やコース、系列の学習内容に合わせた「総合的な学習の時間」を展開することにより、連携型中学校の生徒は、高校が求める必要な基礎的知識や学習内容に中学校の段階から触れることができる。

また、「総合的な学習の時間」において、高校生と中学生が協働して研究活動を進めることによって、異年齢の学習集団間の交流が深まる。中学生は高校生から、技能や知識だけでなく、「学び方」を吸収することもできる。既述の教育課程の基準の特例を利用して、中学校で学習した「総合的な学習の時間」と、高校の地理歴史科、公民科等の授業と結びつけた６年間の教育課程を編成することも可能である。

【中学１年生からの学習の足跡を残すチャレンジテストの実施】

可茂地区で実践されている「チャレンジテスト」は、学力向上に大きな成果をあげている。この「チャレンジテスト」は、連携型中学校において、学習の単元ごとに行

われるもので、連携型高校の教員により採点され、その結果は３年間通じてファイルされる。

こうした取組は、中学生の学習の足跡を確実に残し、生徒に学習の充実感を与え、学習の目標ともなる。採点する高校の教員は、中学生の学習状況について知ることができ、高校での授業改善に生かすことができる。

【夏季休業日等を利用したゼミ等の実施】

高校の教員による中学生を対象にしたゼミ講座を夏季休業中等に開講し、地域の中学生に専門的な学習の入り口となる学習機会を与えることも効果的である。また、高校生がこうした講習会でサポートすることにより、自分の学習を振り返り、確かめることができる。

（２）生徒理解を深める中高の接続の具体例

得られる効果

中学校と高校が生徒情報を共有する等、個に応じた指導の推進

接続の具体例

①中高連携による道徳教育、中高一貫したキャリア教育の推進
②異年齢集団による合同体験学習の実施
③学校行事等の特別活動における中高連携　　等

【中高連携による道徳教育、中高一貫したキャリア教育の推進】

「道徳」の授業を連携型高校においても開講し、連携型中学校と連携型高校で協働して授業展開を行う。例えば、「道徳」の授業において、高校生が中学生を指導するボランティア活動等の実施や、高校教員が中学校で各種の講話をする等の中高連携した活動は、生徒の心の発達と生徒の把握という二面において効果がある。

また、６年間見通したキャリア教育のプランをつくり、中学校卒業時に途切れることのない一貫性のある指導の中で、より個人の適性に合った職業観の育成を図ることができる。

【異年齢集団による合同体験学習の実施】

中学校と高校で同一の特別活動を展開する。例えば、中学生と高校生が宿泊研修を合同で行い、中高協働の作業やレクリエーションなどの活動を実施する。こうした場で、縦のつながりの人間関係によって思いやりの心など豊かな心の育成を図る。特に、少子化の中で人間関係が限られる地域にとっては、生徒の人間関係を幅広くすることができる。

【学校行事等の特別活動における中高連携】

特別活動等での連携によって、生徒理解を深めることが可能となる。例えば、高校の文化祭に連携型中学校が参加するなど、中学生が高校のより自由でより主体的な活動に参加することにより、生徒がその特性や個性を発揮でき、教員がそれを発見したり再確認したりする場をつくることもできる。

（３）個性を伸ばす中高の接続の具体例

得られる効果

６年間の継続した指導の中で、生徒の可能性を伸ばす教育の推進

接続の具体例

①部活動における中高連携した指導の実施
②地域を巻き込んで生徒の個性を伸ばす場の設定
③地域に支えられたキャリア教育の充実による自己実現　　等

【部活動における中高連携した指導の実施】

土・日曜日あるいは長期休業中の中学校と高校の合同の部活動の推進等、連携校の教員が共同で指導する機会を設定する。これにより、部活動における中高間の指導の連続性を確保でき、能力の高い生徒を伸ばすことができる。連携型中学校と高校においては、同一の部活動を設定し、連携して練習ができるようにすることも効果的である。また、美術部のような個人制作が主になる部活動では、中学生と高校生が同じ場で活動できる機会をもつことで、高校生が中学生のよき目標になる。

【地域を巻き込んで生徒の個性を伸ばす場の設定】

地域を題材としたり、地域の人材を活用したりする学習は、地域についての理解を深めると同時に、地域で活躍する人を通して、生徒が地域で活躍の場を見つけることにもつながる。また、地域の中で見守られ活動する中で自分の可能性に挑戦することができる。

【地域に支えられたキャリア教育の充実による自己実現】

６年間の「キャリア教育」の指導計画を作成し、高校教員、中学校教員、地域住民が協働で指導することは、連携校だからこそできる取組である。例えば、地域住民の理解と協力の下で行われる町をあげての職業体験は、生徒の自己実現に向けての大きなステップになると同時に、地域との結びつきを強くする。地域に密着した職場体験を含むキャリア教育は自己実現の場となり、生徒の地域との絆をより一層強くする場となる。

（４）中高を通して行われる地域との接続の具体例

得られる効果

中学生と高校生が協働して行う地域活動の推進

接続の具体例

①「ふるさと学習」を具現する異年齢集団での活動
②ふるさとの企業とともに行う活動の実施　　等

【「ふるさと学習」を具現する異年齢集団での活動】

郷土を素材・テーマとした学習を、中学生と高校生という異年齢集団だけではなく地域住民も含めた学習活動に広げることで子どもたちのふるさとへの理解と郷土愛が深まる。そのためには、地域の行事への参加を前提とした指導計画を作成するなど、地域との連携が欠かせない。

また、地域の観光地をＰＲする方法を研究し実践する活動を「総合的な学習の時間」に位置づけ、地域発展の方策を地域住民とともに企画・立案する。こうした地域に根ざした活動が、自分たちの住む地域の「よさ」を再発見することにつながる。

【ふるさとの企業とともに行う活動の実施】

地域の企業と連携した活動の実施が、学校と地域を結びつけることにつながる。例えば、中学生や高校生が協働して、地元でとれる野菜等のパッケージや商品のキャッチフレーズを立案し、売り上げに貢献するプロジェクト学習も地域との協力で実現できる。また、生産と販売に関する諸問題について地域の人と共に考えていくことは、地域を見つめなおす機会ともなる。

２　連携型中高一貫教育校の設置のモデル

学校、地域社会が一体となって子どもたちの教育を推進していく連携型中高一貫教育校は、中学校と高校との間の距離を縮め、日常的に生徒間、教員間の交流を可能とし、地域に支えられ地域とともに歩む学校として、その期待は大きく、各地域の実情に応じて設置される意義は大きい。

連携型中高一貫教育校の設置について、効果が期待できる地域や、地域によって適した接続方法があるため、その設置形態をモデルとしてまとめた。

（１）連携型中高一貫教育校の設置が望ましい地域の例

連携型中高一貫教育校の設置の望ましい地域は、地域の教育力を生かし、学校、地域社会が一体となって子どもたちへの教育を推進していくことができる地域である。それは、地理的にまとまりがあり、中学校の卒業生の多くが地元の高校へ入学する地域であり、地域の文化や人材等を教育資源として活用することが可能である中山間地等を中心とした地域である。今後、こうした中山間地などに連携型中高一貫教育校を設置することが求められるところであるが、その効果をあげるためには、生徒はもちろん、保護者の理解、市町村行政や教育委員会、地元企業や商工会などの理解と協力を得ることが必要である。

ポイント：連携型中高一貫教育校の設置によって、その効果が期待できる地域

①生徒数の減少が進んでいる地域
②市郡に１校だけ高校がある地域
③交通手段の廃止等により、高校への通学の困難が予測される地域
④入学定員を充足していない高校がある地域
⑤特定の中学校から多くの生徒が進学する高校がある地域
⑥卒業生の多数が同一高校へ進学する中学校がある地域
⑦同一市郡からの進学者の多い高校がある地域
⑧中学校に隣接している高校がある地域
⑨現在連携して活動実績のある中学校と高校がある地域

地域の活性化という役割と､岐阜県のパイロット校としての責任を果たすためには、中学校・高校・市町村教育委員会・地域の相互理解と協力なくして、連携型中高一貫教育校は成立しない。このため、その設置については、中学校の設置者である市町村教育委員会が連携型中高一貫教育校の教育的な意義と地域おける学校の存在意義を十分に理解し認めることが前提となる。特に、少子化や過疎化による地域社会の変化により学校教育に対する不安のある地域においては、各高校及び関係市町村教育委員会による積極的な導入の検討を期待したい。

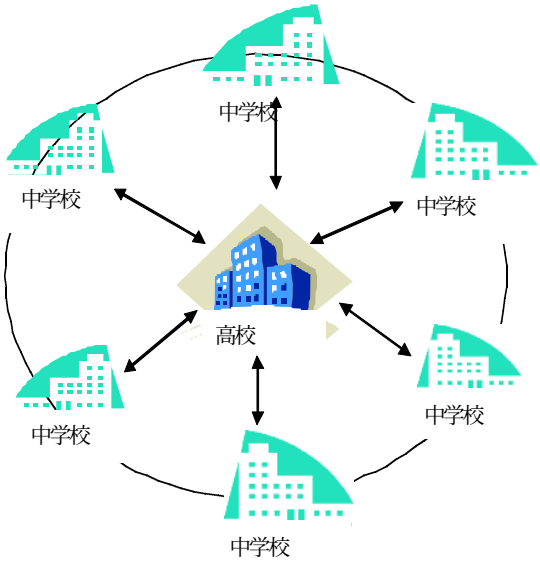
（２）設置のモデル例

連携型中高一貫教育校は、地域の中学校と高校を接続するものであるが、その地域、高校の特長、地域にある中学校数等の実情に合わせて、最も大きな効果があげられる接続の仕方を工夫することも大切である。

例えば、次に示すモデル例は、連携型中高一貫教育校としての中学校と高校との接続の在り方の例である。

モデルA：市町村にあるすべての中学校と高校の連携

市町村単位の連携



連携の特長

設置の条件

・同一市町村の中学卒業者が連携型高校となる高校の入学定員のほぼすべてを満たし、市町村の学校としての特色づくりを求める場合

連携することで期待できる効果

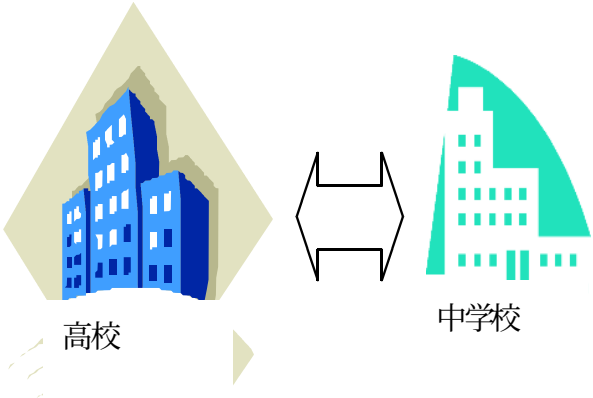
・市町村教育委員会の所管(設置)するすべての中学校が連携型中学校となるため、その協力が得やすい。

・一般選抜の受験者が少なくなると予想されるため、連携型中学校では、「つなぎ学習」を実施する２月後半から３月の教育活動が充実する。

・中学校同士の交流が充実すると予想されるため、中学校の教育活動の一層の充実が期待できる。

モデルB：ある中学校の卒業生がある高校の入学生の過半数をしめる場合の１対１の連携

１対１の接続



連携の特長

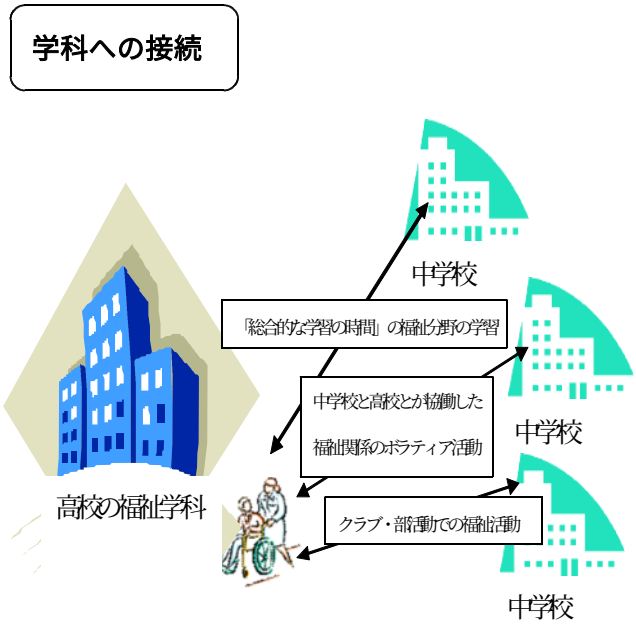
設置の条件

・高校の入学者の過半数が一つの中学校の卒業者で占められる場合

連携することで期待できる効果

・１対１の連携により、１対複数に比べ、より深い一貫教育の推進が生まれ、接続の度合いの強い連携が期待できる。

モデルＣ：高校の特定の学科と、その学科の特色を中学校の特色として生かす連携



連携の特長

設置の条件

・高校の特定の学科と中学校を連携することにより、高校での学習に中学校時から触れ、高校で学ぶ専門性をより高めることを求める場合

連携することで期待できる効果

・高校の学科内容に合わせた教育活動を中学校で実施することにより、高校で学ぶ内容がより深いものとなる。

・連携型入学者選抜において、学科の特色に応じた内容を求めることができ、中学校時から継続的に指導することができる。

市町村合併によって、それぞれの教育委員会が設置する中学校の数も多くなり、高校の再編や生活圏の拡大によって、地域の高校に関する考え方に変化がある中で、「地域の子どもを地域で育てる」といった新しい時代の地域づくりの視点から、地域の高校を、どの中学校と連携させていくかについて、積極的な取組が求められている。